



**ADVANTEST**<sup>®</sup>

# 2019年度（2020年3月期） 第2四半期決算説明会

2019年10月30日  
株式会社アドバンテスト

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

## ご注意

---

### 会計基準について

- 本プレゼンテーション資料に記載されている実績や見通し数値は、国際会計基準（IFRS）に基づいて作成しています。

### 将来の見通しに関する記述について

- 本プレゼンテーション資料およびアドバンテスト代表者が口頭にて提供する情報には、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれています。
- これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務状況や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって明示されているもの又は暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されています。

### 本資料の利用について

- 本プレゼンテーション資料に記載されている情報は、各国の著作権法、特許法、商標法、意匠法等の知的財産権法その他の法律及び各種条約で保護されています。事前に当社の文書による承諾を得ない限り、法律によって明示的に認められる範囲を超えて、これらの情報を使用（改変、複製、転用等）することを禁止します。



```
...mirror_object = ...
operation == "MIRROR_X":
mirror_mod.use_x = True
mirror_mod.use_y = False
mirror_mod.use_z = False
operation == "MIRROR_Y":
mirror_mod.use_x = False
mirror_mod.use_y = True
mirror_mod.use_z = False
operation == "MIRROR_Z":
mirror_mod.use_x = False
mirror_mod.use_y = False
mirror_mod.use_z = True

selection at the end -add
obj.select= 1
obj.select= 1
context.scene.objects.active
= "Selected" + str(modifier)
mirror_ob.select = 0
```

## 2019年度第2四半期決算報告

取締役 兼 常務執行役員 藤田 敦司

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

**ADVANTEST**<sup>®</sup>

## 四半期業績推移

(億円)

	FY18				FY19		前期比		前年同期比	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	増減額	増減率	増減額	増減率
	受注高	706	762	627	657	659	583	-76	-11.5%	-179
売上高	709	727	749	640	662	716	+54	+8.2%	-11	-1.5%
売上総利益	382	389	425	344	394	410	+17	+4.2%	+21	+5.4%
売上総利益率	53.9%	53.6%	56.8%	53.8%	59.5%	57.3%	-2.2pts		+3.7pts	
営業利益	158	180	207	102	152	177	+26	+16.9%	-2	-1.3%
営業利益率	22.3%	24.7%	27.6%	15.9%	22.9%	24.8%	+1.9pts		+0.1pts	
税引前四半期利益	165	186	206	105	149	184	+34	+22.6%	-2	-1.2%
四半期利益	139	162	179	90	121	147	+26	+21.5%	-16	-9.7%
四半期利益率	19.6%	22.4%	23.9%	14.0%	18.3%	20.5%	+2.2pts		-1.9pts	
IFRS第15号適用に伴う 期首受注残の調整	-30									
Astronics社SLT事業譲受に伴う 受注残の増加				+24						
受注残	795	830	708	749	746	613	-133	-17.8%	-217	-26.1%
為替レート	1米ドル	108円	111円	113円	111円	111円	108円	3円 円高	3円 円高	
	1ユーロ	131円	129円	130円	126円	125円	121円	4円 円高	8円 円高	

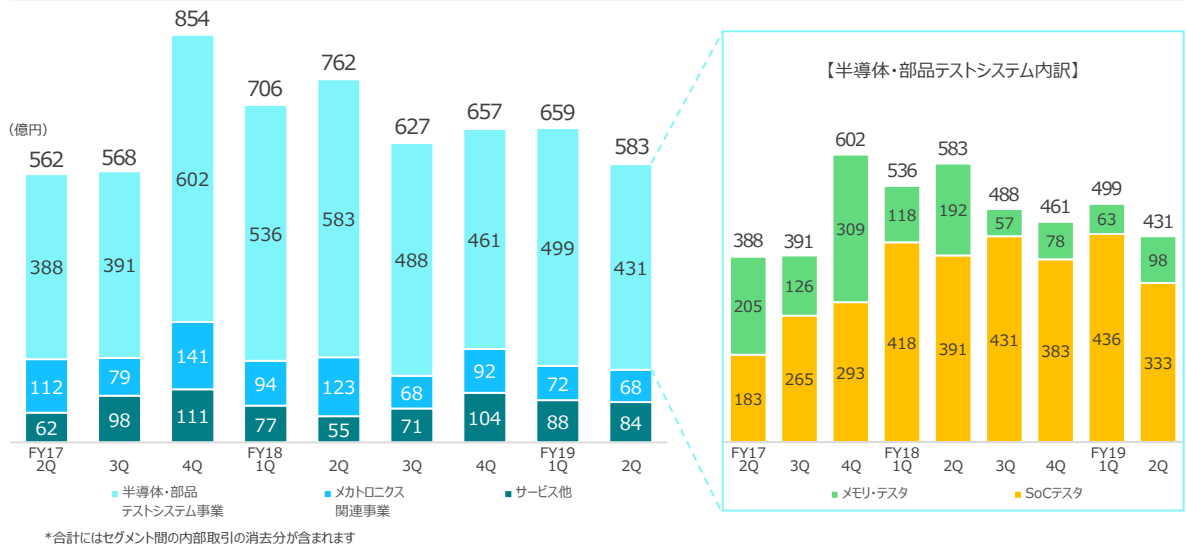
4 | ADVANTEST

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

### ○ 2019年度第2四半期の業績概要

- 3か月前の業界環境を振り返りますと、マクロ経済の弱さや、保護主義的な貿易政策の拡大を受けて、強い不透明感がありました。
- 当社もこの2Qの事業環境に対し警戒感をもって臨んでまいりました。また1Q業績が好調だったこともあり、2Q業績は1Q比減速、と予想していました。
- 実際、鈍い最終製品需要を反映し、多くの顧客ではテスト投資の様子見姿勢が続きました。
- しかしながら5Gの商用サービス本格化が迫るなか、5G関連のSoC半導体メーカーの積極的なテスト投資が続きました。
- これにより、受注については、前期比減少したものの、懸念したほどは落ち込まず、583億円となりました。
- 売上、利益も想定以上に進捗でき、どちらも1Qを超える数字を収めることができました。
- 対前年同期では、1年前非常に活況だったメモリ向けの需要が半減したために受注は下がっています。しかし売上・利益面においてはSoCテストの好調で補なわれ、前年同期と同等の業績となっています。
- 前年度2Qは事業所売却による一過性の利益が約10億円がありました。それを除いたベースでは、営業利益は前年同期を上回ったこととなります。
- 2Qの為替環境については、米ドルがややネガティブな方向で推移しました。

## 四半期受注高 事業セグメント別



### ○ 2019年度第2四半期の事業別受注高

#### ○ 半導体・部品テストシステム事業

- 前期比 13.6%減 431億円
- SoCテストは、333億円となりました。需要の主体は、1Q同様、先端プロセスを使う、スマートフォン用の新規SoCデバイスです。
- 1Qは5Gスマートフォンに使われるアプリケーション・プロセッサやベースバンド・プロセッサのエンジニアリング用のテスト需要がありました。その流れを受け、2Qはそれらの初期量産に向けた投資が行われたものです。
- その他の領域のSoCテスト受注は、全般的に振るいませんでした。
- メモリ・テストは、98億円と、1Q比増加しました。高速DRAM向けのテスト需要が底堅かったことに加え、中国地場メモリ企業の投資が伸びたことによるものです。

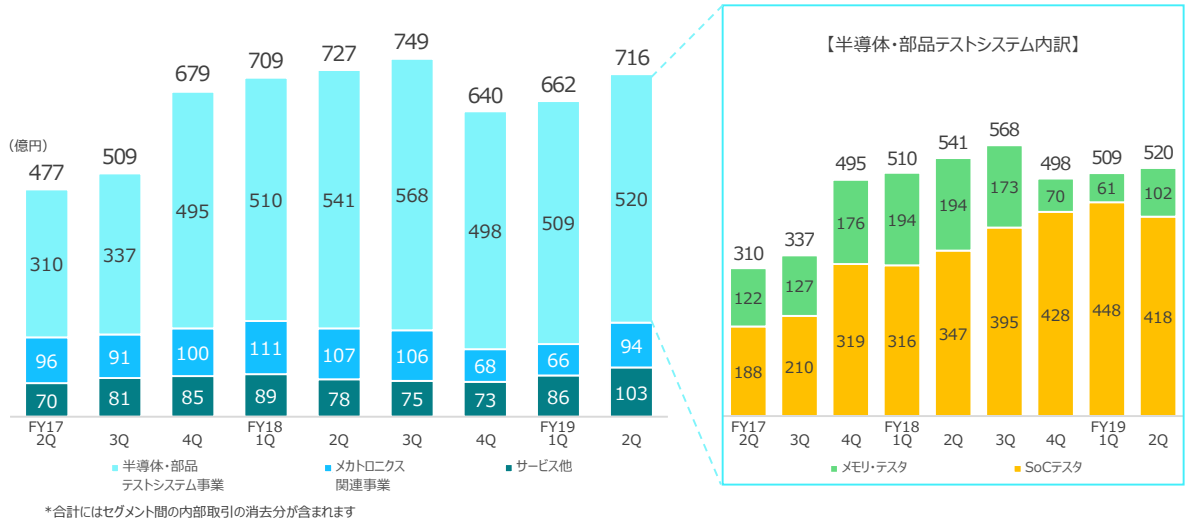
#### ○ メカトロニクス関連事業

- 前期比 5.8%減 68億円

#### ○ サービス他

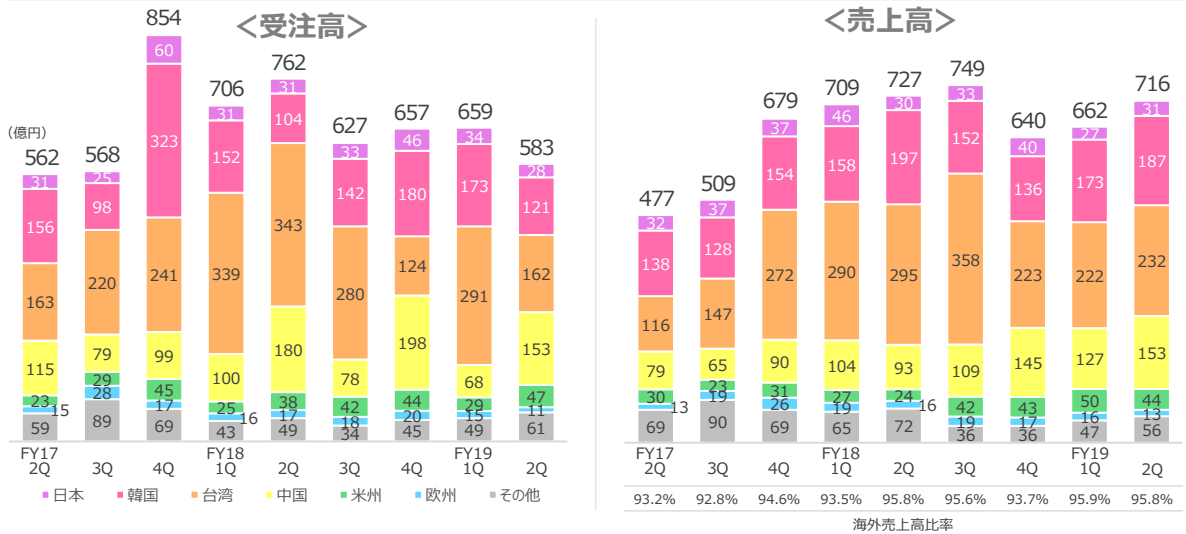
- 前期比 4.6%減 84億円
- 年間保守契約受注は毎年夏場に減少しますが、今年はシステムレベル・テスト関連の受注増で補い、減少率は例年より小さくなっています。

## 四半期売上高 事業セグメント別



- 2019年度第2四半期の事業別売上高
- 半導体・部品テストシステム事業
  - ・ 前期比 2.1%増 520億円
  - ・ SoCテストは、418億円。受注同様、5Gスマートフォン関連のテスト販売が主体です。
  - ・ メモリ・テストは、102億円でした。受注同様、高速DRAMテストなどが売上の主体です。
- メカトロニクス関連事業
  - ・ 前期比 40.6%増 94億円
  - ・ メモリ・テストの販売増を受け、デバイス・インタフェースも増収となりました。
- サービス他
  - ・ 前期比 18.9%増 103億円
  - ・ システムレベル・テスト事業がSSD向け、SoC向けともに増収したことによります。

## 四半期受注高/売上高 地域(出荷先)別



### ○ 2019年度第2四半期の地域別受注高

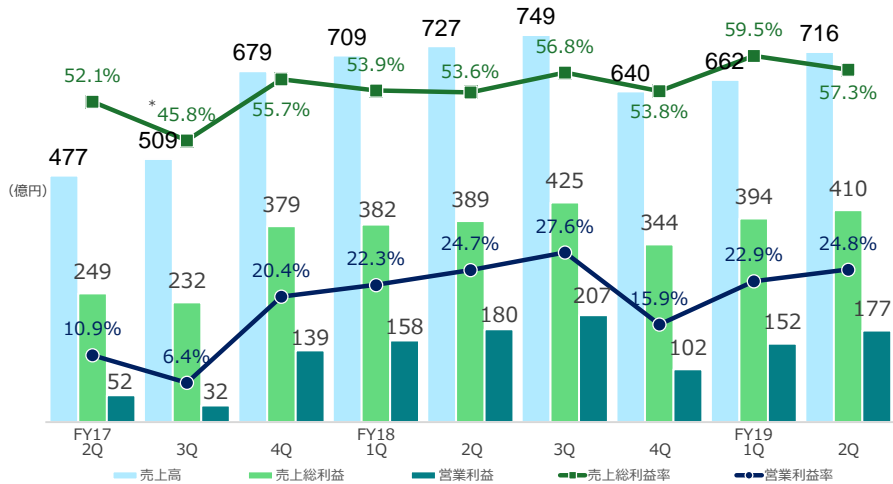
- 台湾  
5Gスマートフォン用SoCに対するエンジニアリング用途のテスト受注が1Qに集中したことで、反動減が生じたもの。
- 中国  
中国ローカルの半導体サプライチェーンの立ち上げ・強化がSoCとメモリ双方で進展し、受注が伸びたもの。

### ○ 2019年度第2四半期の地域別売上高

- 韓国、台湾、中国  
これら地域では、先端プロセスを使うハイエンドSoCのほか、イメージセンサー、パワーマネジメントICなどに使われるテスト売上が堅調でした。

韓国では、この2Qもメモリ・テスト売上は低水準ですが、SoCテストと合わせると安定した売上レベルとなっています。

## 売上高/売上総利益/営業利益



\*FY17 3Qにナノテクノロジー事業の棚卸資産評価損(33億円)を計上しています。  
この評価損影響を除いたFY17 3Qの売上総利益率は、52.3%となります。

### ○ 2019年度第2四半期の営業利益

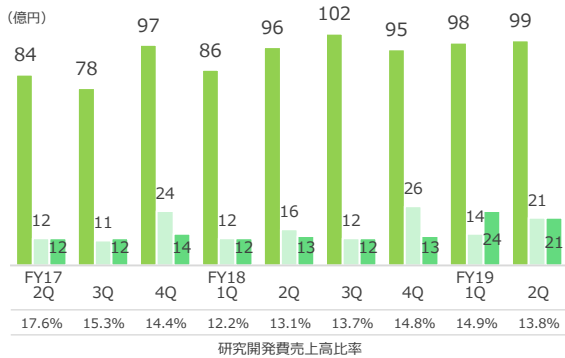
- 売上総利益率 57.3%  
プロダクトミックスはやや悪化しましたが、55%を超えるレベルが続いています。
- 販管費等 233億円  
販管費は1Q比やや減、となりました。
- 営業利益 177億円
- 営業利益率 前期比 1.9ポイント改善 24.8%  
将来の事業拡大のため人員増強を進めており、足元は収益性を改善しにくい状況ですが、25%近い営業利益率を達成できました。



# 投資等/キャッシュ・フロー

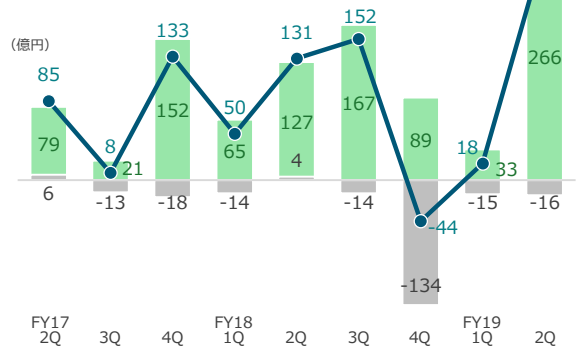
## <投資等>

- 研究開発費
- 設備投資
- 減価償却費



## <キャッシュ・フロー>

- 営業キャッシュ・フロー
- 投資キャッシュ・フロー
- フリー・キャッシュ・フロー



\*フリー・キャッシュ・フロー = 営業キャッシュ・フロー + 投資キャッシュ・フロー

### ○ 2019年度第2四半期の研究開発費等

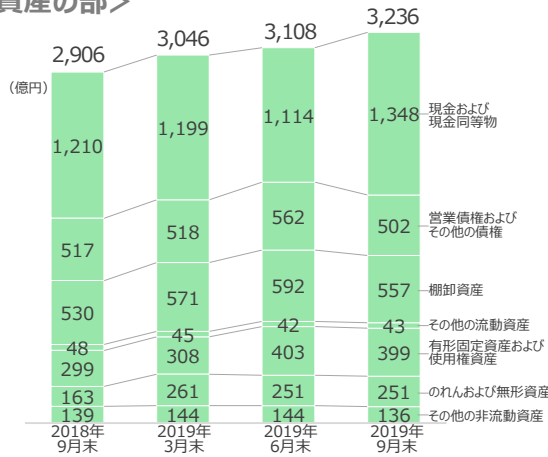
- 研究開発費 99億円
- 減価償却費 21億円  
前年度に比べ増加していますが、これは今年度からIFRSの新リース会計基準を適用したこと、また2月にAstronics社から譲り受けたシステムレベル・テスト事業の無形資産償却費が一時的に多めに出ていることによります。

### ○ キャッシュ・フローの状況

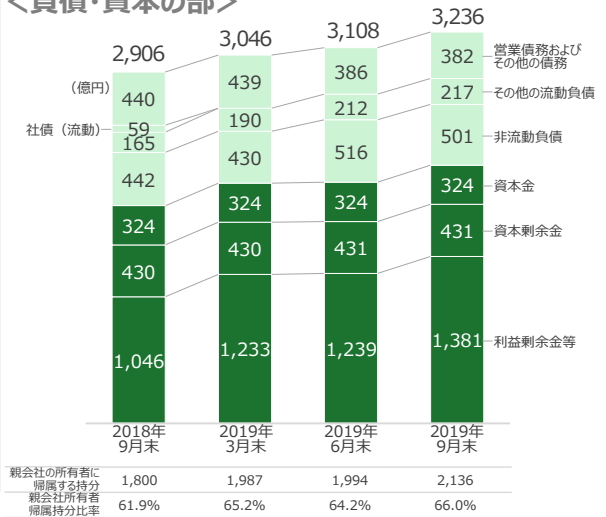
- フリー・キャッシュ・フロー 250億円  
受注と売上のバランスから、2Qは営業債権の回収額が多くなり、営業キャッシュ・フローが増加しました。

# 連結財政状態

## <資産の部>



## <負債・資本の部>



### ○ 2019年9月末時点のバランス・シート

- ・ 総資産 3,236億円
- ・ 現金および現金同等物 前期比234億円増 1,348億円
- ・ 親会社の所有者に帰属する持分 2,136億円
- ・ 親会社所有者帰属持分比率 前期比1.8ポイント増 66.0%



# 2019年度事業見通し

代表取締役 兼 執行役員社長 吉田 芳明

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

**ADVANTEST**<sup>®</sup>

## 半導体テスト市場の動向 <19年10月時点の見方>

### CY18

-半導体の性能・信頼性高度化対応のため、多くの半導体メーカーが活発なテスト投資を通年維持

### CY19予想

-世界経済の不透明感が濃い中、多くの半導体品種でテスト需要も減速

-先端プロセス関連、5G関連のSoC半導体は例外的に力強い動き。SoCテスト市場の見通しを修正

-メモリ・テスト需要も3ヶ月前の想定ほどは悪化せず、持ち直し

-ハイエンド半導体のテスト能力増強投資が市場を牽引する構図は不変。CY20もポジティブなイベントが続く見通し

	CY18実績	CY19推定
SoCテスト市場	約\$2,550M	約\$2,600M (7月時点コメント「\$2,000M以上」)
メモリ・テスト市場	約\$1,150M	約\$550M (7月時点コメント「約\$550Mを割る公算」)

### ○ 暦年2019年のテスト市場の見方

- まず当社の事業環境についてです。
- 米中貿易摩擦はいまだ解決に至らず、それに端を発して多くの製品のサプライチェーンで在庫調整が継続されています。
- 個別の戦略投資案件を除けば、多くの顧客はテスト投資を急いでいません。
- ただ5G関連需要だけは春先から活況で、それを踏まえ、SoCテスト市場のCY19の見通しを約\$2,600Mへと引き上げます。7月時点では、\$2,000M程度と見ていました。
- メモリ・テスト市場の方は低迷が続いていましたが、一部顧客に動きがありました。それを考慮し、CY19は\$550M近辺と推定しています。こちらは、7月時点では「\$550Mを下回る可能性」とコメントしていたものです。
- 当社の強みは顧客ベースの広さ、です。今のテスト市場の状況や顧客のスタンスは、市場シェアの面では不利な面もあります。顧客の投資が一般的に落ちると、特定顧客でのシェアが市場シェアに大きく影響するという事です。
- ただ今回の市場推定が正しければ、そして今回の売上見通しを達成できれば、CY19の市場シェアはSoCもメモリも50%台を維持できそうだと考えています。
- 近年のテスト需要の牽引役は、半導体の高性能化に即したテスト強化・信頼性保証の強化にあります。実際、SoCでも、それから今は目立ちませんがメモリでも、ハイエンド半導体の生産が拡大しています。
- テスタ市場は来年以降まだまだ伸びる余地があると考えています。

## FY19業績予想

	FY18 実績	FY19				前年度比		(参考)新旧予想比較	
		上期 実績	下期 予想	通期 予想	増減額	増減率	7月時点 FY19予想	修正額	
受注高	2,752	1,242	1,108	2,350	-402	-14.6%	2,300	+50	
売上高	2,825	1,378	1,092	2,470	-355	-12.6%	2,300	+170	
営業利益	647	329	121	450	-197	-30.4%	300	+150	
営業利益率	22.9%	23.9%	11.1%	18.2%	-4.7pts		13.0%	+5.2pts	
税引前利益	662	333	125	458	-204	-30.8%	310	+148	
当期利益	570	268	97	365	-205	-36.0%	260	+105	
当期利益率	20.2%	19.4%	8.9%	14.8%	-5.4pts		11.3%	+3.5pts	
受注残	749	613	629	629	-120	-16.0%	749	-120	
為替レート*1	1米ドル	110円	109円	105円	107円	3円 円高	110円	3円 円高	
	1ユーロ	129円	123円	120円	121円	8円 円高	130円	9円 円高	
ROE	35.3%	-	-	17.6%	-17.7pts		12.6%	+5.0pts	
1株当たり配当金*2	92円	41円	未定	未定	-		未定	-	

\*1: 為替レートの変動がFY19の営業利益に与える影響の最新見通しは、対米ドルが1円高時マイナス5億円です。対ユーロはプラス1億円です。

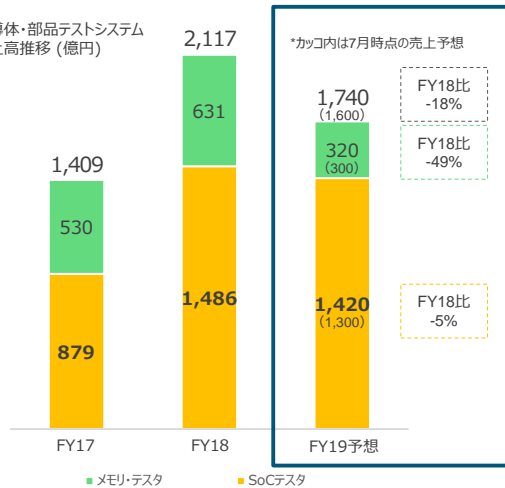
\*2: FY18の1株当たり配当金は、上期が50円、下期が42円です。

### ○ 2019年度の業績予想

- 世界経済の不透明感、最終製品需要や半導体需要の減速感がずっと続いています。5G関連のテスト需要増にカバーされ、上期の業績は当初の予想を超えて進捗しました。
- これを踏まえ、業績予想を修正します。
- 売上高については170億円、営業利益については150億円、当期利益については105億円、の増額となります。
- 5G関連需要の加速ということで、この上期、非常に活発なテスト投資をいただきました。そのためこの下期は、5G関連の受注はいったんペースダウンする可能性があると考えています。
- 一方、このところ軟調続きだったメモリやストレージ関連で、少しですが需要が増えています。その両方を総合した受注・売上計画です。
- 売上総利益率は前年度実績54.5%から数ポイント改善の、56-57%前後で見えています。
- 下期の為替前提については、直近の実勢値を踏まえ、米ドルは105円、ユーロは120円へ見直しました。
- 通期では米ドルは107円、ユーロは121円となります。

## FY19見通し（事業別）

半導体・部品テストシステム  
売上高推移（億円）



### 半導体・部品テストシステム事業

#### <SoCテスト>

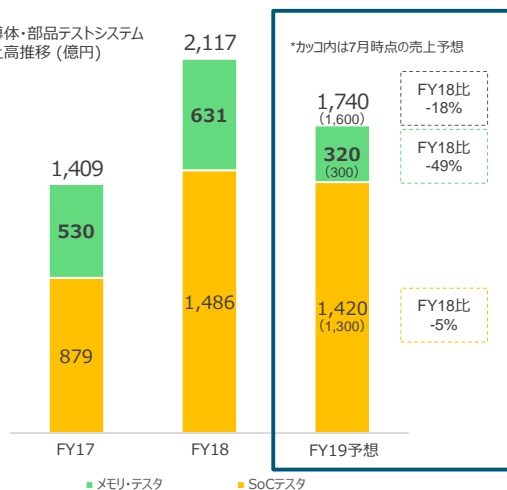
- 半導体高性能化の進展が当社のSoCテスト需要水準を下支え。年度売上予想を引き上げ
- 半導体高性能化の代表格は、5G端末に今後使用されるアプリケーション・プロセッサ/ベースバンド・プロセッサ、およびイメージセンサ
- 下期に5G向けは一旦受注減速する可能性があるが、SoC半導体のテスト能力増強トレンドは数年にわたって継続

### ○ SoCテスト事業の今期見通し

- 半導体高性能化の進展がSoCテスト需要の水準を下支えする、という大きな流れが続いています。
- 特に今期の売上の軸は、5G端末に搭載されるアプリケーション・プロセッサやベースバンド・プロセッサに対するテストです。
- 上期は、それら先端SoC向けで、想定以上の受注を複数の大手半導体メーカーからいただきました。下期にもそれらが売りあがっていき、SoCテスト事業は前年度並みの売上となる見込みです。
- 一方で5Gスマートフォンの来年の作りこみ時期なども考え併せると、この下期、5G関連の受注がいったんペースダウンする可能性もあると考えています。
- もっとも、その調整は一時的なものとなると思います。
- 5G端末の普及はこれから、つまり来年以降であり、またサーバーやゲーム端末の高性能化も来年進みます。そして5Gのミリ波帯域への展開が数年先に控えています。
- これら大きなエレクトロニクス業界の動きが、SoC半導体の数量増・性能向上、先端プロセスの採用拡大という動きを通じ、SoCテスト需要を喚起し続ける、と期待しています。

## FY19見通し（事業別）

半導体・部品テストシステム  
売上高推移（億円）



### 半導体・部品テストシステム事業

#### <メモリ・テスト>

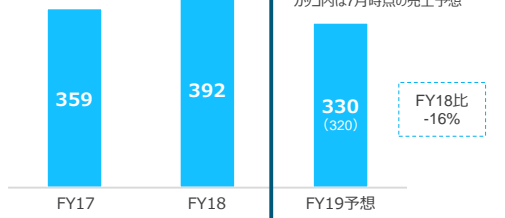
- 在庫調整が長期化しているが、やや環境に改善感
- DRAMのDDR5シフト、HPC向け高速品など、メモリ市況に左右されにくい領域で需要拡大の兆し
- ビット需要回復につれ、テスト需要の連動回復を期待

### ○ メモリ・テスト事業の今期見通し

- DRAMではDDR5へのシフトやHPC（ハイパフォーマンス・コンピューティング）向け高速品需要の拡大など、メモリ市況そのものに左右されにくい明確な技術ドライバーが存在します。
- 全体に市況が良くない中、この方面でテスト増強投資が4Qからスタートする、というこれまでの期待は、変わりません。今年度の初めは3Qスタートと見ていた需要ですが、今のところ4Qから、という見方です。
- 加えて、2Qの受注にも表れていますが、3か月前の予想よりもDRAM向けの引き合いが増えてきていることを受け、メモリ・テストの年度売上見通しを、若干ですが引き上げます。300億円から320億円への引き上げです。
- ハイエンドDRAMの需要増に加えて、NANDでも積層化のトレンドが継続されています。ビット需要が戻れば、構造的にテスト市場は本格回復します。また中国においても、NANDのみならず、DRAMテスト市場が立ち上がりつつあります。
- 期待を持って今後の展開をウォッチしていきたいと思えます。

## FY19見通し（事業別）

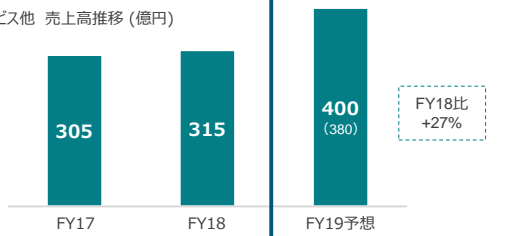
メカトロニクス関連 売上高推移（億円）



### メカトロニクス関連事業

- メモリ顧客のテスト投資減の影響が強いが、メモリ・テストと連動してインタフェース製品も若干の需要増へ
- EUV関連需要の取り込みによりナノテク製品は増収見通し

サービス他 売上高推移（億円）



### サービス他事業

- 顧客内のテスト稼働は一定維持されており、中核事業であるフィールド・サービス売上の底堅い推移を見込む
- SSD、SoCのシステムレベル・テストで売上順調

### ○ メカトロニクス関連、サービス他事業の今期見通し

- メモリ顧客のテスト投資減速長期化に伴うメカトロニクス関連事業の減収見通し、に変わりはありませんが、メモリ・テスト売上見通しの引き上げに合わせて、若干ですがセグメント売上予想を10億円上乘せし、330億円とします。
- サービス他事業は400億円へ、見通しを20億円引き上げます。
- フィールド・サービスで底堅い売上を見込めるほか、SSDのシステムレベル・テストが想定より伸びています。加えて、2月に買収した米Astronics社のシステムレベル・テスト事業が見込み通り進捗しており、それらを反映しました。



## 中長期成長に向けた取り組み

### 「グランドデザイン」(長期経営方針・FY18-27)

<ビジョン・ステートメント>

「進化する半導体バリューチェーンで顧客価値を追求」

<経営目標>

「売上高3,000億円～4,000億円の達成」

- 成長分野へのフォーカス、顧客とのパートナーシップ強化でシェアを年1%ペースで改善 (CY17実績:36%→CY27目標:46%)
- 新規事業として、現在のコアビジネスの周辺分野の開拓

### 中期経営計画(FY18-20 平均)

	保守的シナリオ	ベース・シナリオ
半導体試験装置市場 成長率	年0%	年4%
売上高	2,300億円	2,500億円
営業利益率	15%	17%
ROE	15%	18%
1株当たり当期利益(EPS)	135円	170円

### FY19重点施策

- 業界をリードする最重要顧客とのエンゲージメント強化
- 市場シェアの維持・拡大
- 中長期的成長の観点での人員増強、人材開発強化
  - R&D人員、マーケティング/セールス/SE/サービス要員を増強
- オペレーショナル・エクセレンスに向けた業務効率化
- ROICを活用した事業運営の高度化

<開発投資・設備投資の見通し>

	FY18実績	FY19予想
研究開発費	379億円	390億円
設備投資	66億円	100億円
減価償却費	50億円	95億円

### ○ 中長期成長に向けた取り組み

- 当社の中長期成長に向けた取り組みについて説明しますと、当社は、昨年4月に策定した10年間の中長期経営方針に沿って、経営を推し進めています。
- 下期の重点施策は、年度初めのものから変わりありません。20年以降のシェア維持・拡大のため、業界をリードする最重要顧客とのエンゲージメント強化と市場シェアの維持・拡大を、最優先に取り組んでいきます。
- 5G向けの次期、そしてその先の新デバイス開発についての顧客からのサポート依頼は、高まる一方です。SEなどの人員増強、開発投資を加速します。
- 年度初めは人員増を今期約200名で計画していましたが、顧客からのサポート需要は強く、それ以上としたいと考えています。
- 設備投資については、当社は生産キャパアップのための大型投資は当面不要なため検討していませんが、生産・開発効率アップのための設備更新や、ITシステムへの投資は、積極的に進めます。
- これらを総合すると、通期の研究開発投資は390億円の見通しです。設備投資は期初計画100億円から変更ありません。減価償却費は95億円、研究開発費を含めた販管費は950～960億円近辺となる見通しです。

## サマリー

- SoCテスト投資増にサポートされ、FY19上期は期初予想を超える進捗
- 良好な進捗に照らし、通期業績予想を上方修正
- 下期は一時的な受注減速を見込むが、中長期的なテスト需要拡大基調に変化なし
- 「顧客価値の追求」というビジョンに沿い、さらなる顧客サポート強化に取り組む

### ○ サマリー

- この上期は、SoCテストの投資増にサポートされ、当初の想定を超える業績進捗となりました。結果として、売上・利益ともに、通期の予想を上方修正いたしました。
- 主要顧客の投資動向から、下期は一旦減速する可能性を織り込んでいるものの、5G、HPC、IoTなどに使われる最先端デバイスの開発は顧客各社で幅広く進んでいます。
- これは、半導体の微細化や積層化、チップ同士の統合といった、より精度の高いテストを必要とする技術や、信頼性担保がより難しくなる技術が広がっていく、ということを意味しています。
- このトレンドは、確実にテスト市場の成長を中長期的にサポートします。
- 米中関係、世界経済、為替などの不透明要因は解消されておらず、4Qについてはまだ回復の確信が持てない状況です。環境急変リスクには常に備えておく必要があります。機会とリスクをよく吟味しながら、アドバンテストをさらに成長させていきます。
- 今後とも、顧客サポートの強化を通じて、中長期経営方針「グランドデザイン」で掲げた目標の達成に努めていきます。
- なお当社は今年、統合報告書を初めて作成しました。関係者の皆様からのご質問・ご意見をいただきたく、よろしくお願いいたします。